

---

# 変人学園の日常

水瀬唯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変人学園の日常

### 【Nコード】

N2457Y

### 【作者名】

水瀬唯

### 【あらすじ】

ここは美城学園。都会にある高校。その学園に通っている冬樹雪斗。今日は新学期。これまで雪斗はあまりパツとした高校生活を送れていなかったのも、最後の年くらいいい生活が送ればいいなと思っていた。親友の風神もクラスは一緒に、いい生活が送れそうだなと思った。……教室に入るまでは。そこにいたのは個性豊かすぎる生徒たちがいた。毒舌お嬢様、嫌われながらも一途な恋をする熱血男、うるさいバカ、物忘れを通り過ぎた物忘れなど。雪斗ははたしている学園生活を送れるのか？ 超ドタバタコメディ！

## プロローグ（前書き）

初めまして、水瀬です。

超駄作ですが、読んでくれたらうれしいです。

## プロローグ

ここは美城学園。どっちかつうと都会の方にある高校。

その学園に俺、冬樹雪斗ふゆきせつとは通っている。

いつもどおり電車に乗り、いつもどおりに登校する。

今日から俺は高三になる。そう、今日は新学期だ。

正直、これまで俺はあまり充実した高校生活を送れていなかった。だから高校最後のこの年で少しでも充実した生活が送れたらいいな  
と思っていた。

ちよっとした期待を背負って門を通り抜けた……



もうすでにクラスは発表されていた。たくさんの人が下駄箱前に  
集まっていた。

俺はその人ごみの中にまぎれる。

そして、やっと紙の前にたどり着いた。

「俺は……5組か……」

俺はそれを確認して、人ごみから出た。

「よっ！ 雪斗、おはよー」

「ああ。おはよう」

すると突然、聞き覚えのある声が後ろからした。

そいつは数少ない俺の友達、『市川風神』いちかわふうじん。1、2年ともクラス  
が一緒でとても仲がいい。

その風神も人ごみにまぎれてクラスを見に行った。

しばらくして風神が戻ってきた。そして風神が俺にクラスのこと  
について聞いてきた。

「雪斗は何組だった？」

「5組だよ。風神は？」

「おお、俺も5組だよ。また一緒だな、よろしく」

「うん。こちらこそ」

風神が一緒でかなり安心した。こいつが一緒だと、話し相手がいるからな。

そして俺たちは教室に向かった……

## プロローグ（後書き）

次話もよろしくお願いします。  
感想・評価等もお願いします。

## 第1話 個性豊か過ぎるクラスメイト（前書き）

キャラがごちゃごちゃしています。読みづらいと思います。すいません。

## 第1話 個性豊か過ぎるクラスメイト

俺らは、教室に向かった。3年生にもなると階は最上階なので正直疲れる。

やっと教室に着くことができた。

扉を開け、教室に入る。

もうすでにたくさんの生徒が集まっていた。

俺は自分の席にかばんを置き、後ろのほうで風神と話した。しばらく話していると、担任らしき人が教室に入ってきた。

「おい、席に座れ。早くしないと塩酸ぶっかけるぞ」

恐ろしいほどみんな早く席についた。もちろん、俺も風神も早く席に着いた。何なんだこの教師（らしき人）は。

「え、3年5組の担任になった夏芽美保だ。なつめみほよろしく」

『いやです!』

全員が声をそろえてそう言った。もちろん、俺も風神もそう言った。何なんだこの教師（らしき人）は。

「塩酸ぶっかけるぞ」

『よろしく願います!』

全員が声をそろえてそう言った。もちろん、俺も風神もそう言った。そう、この人は担任だ。

何とか落ち着いたところで、自己紹介タイムが始まった。



「蒼井瑞希あおいみずきです。……っていうか自己紹介って何ですか？ 私、物忘れ激しくて……物忘れて何ですか？」

彼女は蒼井瑞希さん。外見は青髪のきれいなロングヘアで美少



女だ。背もすらつと高くスタイルもよい。

しかし物忘れが激しい……というか物忘れの域を超えている気がする。

んゝ、僕も頭がよくないから友達になれる気がするなゝ。

「———ということでもよろしくお願いします。お願いしますって何ですか？」

前言撤回。僕以上にバカだ。何を言っても無駄な気がする。

「俺は市川風神。いちかわふうじんよろしく」

こいつはさっき言ったとおり市川風神。俺の数少ない友達。

男なのだが、その容姿は正直女の子にしか見えない。今風に言う  
と男の娘というのだろうか。

紫色の髪の毛でショートヘアー。頭もいいし、スポーツも出来る。  
妬ましいほど弱点がないやつだ。

強いて挙げるなら、女の子扱いをしたらかなり傷つくところだろうか。

「縁道寺龍希。えんどうじりゅうきよろしく」

彼は縁道寺龍希君。なんだか無愛想だけど実はとても優しい……  
という噂を耳にしたことがある。

緑色の短髪だ。おそらく真面目な人なんだろうなゝ。

「尾崎修吾おざきしゅうごっす！　よろしくゝ！」

このチャライ男子は尾崎修吾君。とにかくチャライ印象が強いな。  
茶髪のショートヘアーで、外見は結構イケメンなんだが……チャ  
ライ。

めがねかけたら「僕チャラメガネ！」とか言いそうだ。正直、苦  
手なタイプだ。

「僕は木野山広隆。きのやまひろたかよろしくね」

このいかにも「僕は紳士です」みたいな喋り方の彼は木野山広隆君。

水色の髪の毛でちょっとはねている。

噂で聞いたけど……サッカー部で超弱いとか。

「俺は鶴嶋鍵太<sup>つるしまけんた</sup>。よろしくな、レディたち」

こいつきらい……じゃなかった！ こいつは鶴嶋鍵太君。

黒髪で少し長めのショートヘアー。

噂で聞いたけど、本気でハーレム作る気だとか……全く、バカな夢だ。

「藤堂裕也<sup>とうどうゆうや</sup>です。好きな人は野崎……キャツ言っちゃった！」

このうっとうしい……じゃなかった！ このにぎやかな人は藤堂裕也君。

少し赤みの入った髪ではねている。自己紹介で言った通り野崎さんLOVE。

無駄な恋心を抱いている人。

「私は野崎秋葉<sup>のざきあきは</sup>です。よろしくお願いします。あと藤堂君は死んでください」

彼女は野崎秋葉さん。暗めの茶髪でせみロングにピンどめをしている。

整った顔立ちだし、噂では成績優秀。性格も穏やかで落ち着いているらしい。

藤堂君のことになるとちよう毒舌になるのだが……。

「えー、冬樹雪斗です」

そして俺、冬樹雪斗。

銀髪ではねている。

そして次々と自己紹介していった。まあ、とりあえず個性的だった7人は覚えておこう（風神は省く）

しかし、名簿の最後の人が来ていない……休みだろうか。

「じゃあラスト、渡島！ ……おい渡島は休みか」

先生が言った寸前にドアを開ける音がした

「遅れてすみませんでした」

1人に少女が入ってきた。

「お前、渡島か。今ちょうど自己紹介しているところだ。とっととお前もしろこのカス」

「カスって言ったよね！ 今カスって言ったよね！ ってか先生だよね！？」

やはりこの教師はひどかった……。

「ええーと。渡島愛羅<sup>わたじまあい</sup>です。よろしく」

遅れてきた少女は渡島愛羅さん。ウエーブがかかったロングヘアで頭のリボンが特徴的。このクラスでもかなり目立っている金髪碧眼美少女。

身長は140cmあるかないかぐらい低い。体系的には幼児だ。覚える人1人追加。

全員の自己紹介が終わり休み時間のなった。

「ああー。やっと終わったー。終わったって何ですか？」

蒼井さんはいつも大変そうだなー。テストとかどうしているのだろう。

「へーい。終わったぜー、ヒュー」

相変わらずチャライ尾崎君。苦手なタイプだ……。

「ふふふふ。今年こそはサッカー部レギュラーになるぞー」

夢を語っている木野山君。実力は知らないけど噂からすると無理だろう。

「俺はハーレムを作る！」

分かると思うが鶴嶋君。なんともバカな夢だ。一生叶わないだろう。

「野崎く。俺と付き合ってくれく」

「うっさい！ 消えろこのゴミ」

こちらは藤堂君と野崎さんのやり取り。藤堂君は一途だけど正直うっとうしい。

野崎さんも野崎さんで毒舌過ぎる気がするけど……。

渡島さんはまだ性格がよく分からないけど……容姿からするとお嬢様っぽいのできつと上品な人なんだろう。

縁道寺君は相変わらずクール。だけど真面目っぽい。

そして担任の夏芽先生。何よりも怖い……。

風神だけが頼りのこのクラス、俺はやっていけるのだろうか……。

## 第1話 個性豊か過ぎるクラスメイト（後書き）

次話もよろしくお願いします！

## 第2話 美少女の素顔（前書き）

第2話です。ぜひ読んでください

## 第2話 美少女の素顔

あの大波乱の自己紹介から翌日、今日からは普通に授業が始まる。

「おい。席につけ。早くしないと塩酸ぶっ掛けるぞ」  
みんな一瞬で席に着いた。やはりこの先生は怖い。

「起立！ 礼！」

『お願いします』

号令をかけ、席に座る。そして先生が連絡事項を話し始めた。  
いくつかの連絡事項を聞き、HRはあっさり終わった。



「じゃあ1時間目は学級長や委員会を決めるぞ。カス共」  
『カスって言ったよね！ 今カスって言ったよね！』

相変わらずひどい夏芽先生。なぜ教師をクビにならないかは不明だ。

「まずは学級長だ。やりたい奴いるか？」

クラス全体がシーンとしているやはりみんなやりたくないのだろう  
……まあ俺もだけど。

そのシーンとした中で1人立ち上がった。

「僕が学級長になりましょう！」

立ち上がったのは、ハーレムを作るというバカな夢を持っている鶴  
嶋鍵太君だ。

「よし。ほかの奴いないか」

「ちょっと先生！ 待って下さいよ！」

夏芽先生はあっさりスルーした。まあ、当然のことだが……。

「一応聞くが鶴嶋よ。お前は何が目的で学級長になるんだ？」

「もちろんハーレ……」

「あみだくじ。よし、あみだくじにしよう」

鶴嶋君の夢、終了。微塵もかわいそうと思わない。

結局、男女共にあみだくじになった。俺はこういうときに当たってしまうタイプ何だけども……。

いや、いくら物語だからといってそこまでベタな展開無いだろう。ここは真面目そうな縁道寺君にあたったり……

「あみだくじの結果、冬樹になった。頑張れよ」

するわけなかった……うん、冷静に考えてみれば物語だからなるに決まってるよね。

周りを見ると鶴嶋君悔しがっている。変わってあげたいよ本当に……。

しかし学級長って何やればいいか分からないや、まったくやったことないし。

まあ、女子に任せればいいか。蒼井さんじゃない限りは大丈夫だろう。

「女子は渡島だな。頑張れよ」

渡島さんか……まあ、大丈夫かな？ しっかりしてそうだしな。

「じゃあほかの委員会決めるぞ」

ほかの委員会は適当に決まった。



「最悪だ」

今は休み時間なのだが学級長なので荷物を職員室まで運んでいる。チクショウ……あのクソ夏芽。いつか一発殴ってやりたい……その後死ぬかもしれないけど。

隣では渡島さんが荷物を持ってだるそうに歩いている。

自己紹介のときにも言ったがかなり美少女だ。

金髪のきれいな髪、整った顔立ちで碧眼、誰もが憧れるような美少女。



きつと性格もよいのだろうか……

「ちっ、だるいな」

ん？何か聞き間違いだろうか。今、渡島さんがすごく毒舌発言をしたような……

「お前、冬樹だっけ？」

「うん……そうだけど……」

何か、渡島さんのキャラが違う気がするのだが……。

いやいや、落ち着け！ 冬樹雪斗！ こんなに美少女な子だぞ！？

そうだきつと空耳だ空耳！ きつと空耳……

「ふん！ こんなだめ男と一緒になんて最悪！」

空耳じゃねえええ。今はっきり聞こえた！ だめ男って言った！間違えない。こいつは性格が悪い、そして毒舌。

「ったく。高校最後のこの年に学級長って……マジで面倒くさい」  
めちゃくちゃ不機嫌そうな顔でいった。何なのこの子！ 性格悪すぎ！

「あの……渡島さん？」

「うるさい！ プロローグでは主人公っぽくなっていたのに1話からは個性的なキャラに押されて存在薄くなってきた影薄男！」

痛いところをついた……悲しくなってきた……。確かに影薄くなってきたけど……

高3新しく覚えた個性的な8人の中で縁道寺龍希君、野崎秋葉さんに並んで真面目だと思っていた渡島愛羅さんはとんでもない毒舌少女だった……。

俺は本当に大丈夫なのだろうか……。

## 第2話 美少女の素顔（後書き）

会話文が多くてすみません……。  
次回もお願いします！

### 第3話 くじの結果、保育園へ（前書き）

第3話です！

またしてもぐだぐだです！ すいません！

### 第3話 くじの結果、保育園へ

「野崎LOVE〜！ 結婚してくれ〜」

「死ねこのゴミ！」

「俺はハーレムをつくる！」

「あげぽよ〜！」

今日もにぎやかすぎる人たちにまぎれて、俺は風神と話していた。最近風神以外にもいろんな人と話すようになったのだが、やっぱり風神と話していると落ち着く。

「学級長大変そうだな。大丈夫か？」

「大丈夫じゃねーよ。渡島さん、すぐく毒舌だし……」

学級長に選ばれてから1週間たった。すでにばてている俺。

学級長の仕事自体はそれほど大変ではないのだが、渡島さんの毒舌とクラスのテンションの高さに疲れている。

いろいろ話しているうちに朝休みが終わり、夏芽先生が入ってきた。

「お〜い、席につけ〜。さもないと塩酸ぶっ掛けるぞ〜」

みんな一瞬で席に着いた。もちろん俺も風神も。何これ？ 定番になってるの？



「ええ〜と、もうすぐ仲良し遠足があるぞ〜」

『小学生か！』

見事にはもった全員のツツコミ。遠足って……マジで小学生だな。「まあ、私たちがするわけじゃない。保育園からお願いがあつてな、交流会みたいな感じだ」

なんだそういうことか。小説ならではの設定だ。

「そこで全員で行くのは多すぎるから10人ほどに絞ろうと思う。」

とつとあみだくじをするぞ」

今回は最初からいさぎよくあみだくじにする夏芽先生。前の体験から学習したのだろう。

交流会のメンバーって小説的に行くと……俺が覚えた個性的な8人と風神と俺だったりするのかな？

まさかな。そこまでうまくいかないか……なりたくも無いしな。

「あみだくじの結果、男子は冬樹、市川、尾崎、木野山、藤堂、縁道寺、鶴嶋で女子は渡島、蒼井、野崎だ。」

うわゝマジで当たった……。さすが小説、ある意味怖いよ。

それにしてもこのメンバー……風神と縁道寺君と野崎さんは真面目なのでいいとして、ほかの6人はかなりきつい……。

みんな性格が濃すぎて俺の存在がますます薄くなるじゃないか！

……ていうか消えるんじゃないかな……。

「とにかく、決まったことだ！ 頑張れよ」

『嫌です！』

「塩酸ぶっ掛けるぞ」

『頑張ります！』

相変わらず塩酸大好きな夏目先生。何これ？ 定番になってるの？

◇

◆

◇

——ということで、当日の朝（早っ）

俺たちが行く保育園はひまわり保育園。美城高校よりも少し遠いので、いつもより早起きしていく。

ちなみに現地集合なのでみんななどの待ち合わせももちろんしていない。まあ、あいつらと行くのはいろいろと面倒くさいしな……。

うだうだと駅に向かっていたらいきなり高級そうな車が横に止まった。

「あっ、冬樹じゃない。おはよう」

「お……は……よ……う……」

俺を呼んだのは渡島さん。どうやらこの高級そうな車は渡島さんの家のものらしい。

渡島さんってもしかして超お嬢様なのかな？ まあ外見だけはお嬢様っぽいからな。似合わないことはない。

「どうせ一緒のところ行くのだから乗って行かない？」

「え……いいの？」

「いいよ別に……」

親切に渡島さんが行ってくれたのでお言葉に甘えて乗らしてもらった。

「渡島さんはいつも車で学校まできてるの？」

「まあ、歩くの面倒くさいし疲れるしね」

普通の人は面倒くさくても疲れても歩かなくちゃいけないのに……ちくしょう羨ましい……

「あと、渡島さんって呼ぶのやめてくれない？ 私苗字で呼ばれるの好きじゃないんだよね」

「そうなの？ ってじゃあなんて呼べばいいのさ」

渡島さんの性格からすると……「愛羅様」とかだろうか。それはいやだな……

「ふつうに愛羅でいいよ」

「えっ」

少し以外だった。てっきりもっと変なのかと思ってた……。お嬢様を呼び捨てで呼んでいいかは分からないが、本人が望んでいるのならそれでいいか……

「じゃあこれからは愛羅って呼ぶよ」

「うん、よろしく」

そして俺たちはいろいろ話しながらひまわり保育園に向かった……。

### 第3話 くじの結果、保育園へ（後書き）

次回は、ひまわり保育園に着きます。

#### 第4話 ひまわり保育園にて……（前書き）

前回の続きです！

今回はいつもより会話文が多く、読みづらくなっていますが頑張って読んでください。



#### 第4話 ひまわり保育園にて……

——ひまわり保育園——

「ち～す！冬樹と愛羅」

真っ先に挨拶してきたのは尾崎修吾君。朝からチャライ……。

ちなみに、もうきているのは風神、尾崎修吾君、野崎秋葉さん、縁道寺龍希君、木野山広隆君だ。

残りの3人はまだ来ていない。まあ、大体予想はしていたけど。

「おはよう。冬樹君、愛羅。今日は頑張ろうね！」

こちらは野崎さん。な……なんて優しい人なんだ！ 何だかんだ言っても野崎さんはやっぱりやさし……

「野崎いいい！ おはよー！」

「消えろごみ虫！」

うむ……前言撤回するべきなのだろうか……。いや、言いかえるだけにしておこう。

野崎さんは優しい。藤堂君以外には……

「まあ、気楽に頑張ろうぜ冬樹」

縁道寺君は完璧人間だ。めっちゃくちゃ優しい。

◇

◆

◇

しばらくして全員そろったので遠足についての話を保育園の先生に聞いた。

「高校生の皆さん、本日はおこしいただきありがとうございます。

私、園長の田中花子たなかはなこと申します」

すごく平凡な名前の園長さん。ありがちすぎる……。

「今回はゆり組の遠足です。ゆり組は20人のクラスなので大丈夫だとは思いますが……まあ頑張ってください……はい」

園長、なんか暗い……ていうか怖い。

「私がゆり組担任の佐藤明子さとうあきこです。よろしくお願いします」

なぜこんなに平凡な名前が多いのだろう。田中と佐藤って日本で多い苗字5位以内には入ってるぞ……まあいいか。

こっちの先生はわりと気さくでいい人だった。そこそこ美人だし。

8時30分頃、子供たちが登校してきた。

「せんせえー！ おはよー！」

「おはよーございます」

可愛い子供たちが登校してきた。幼い子って可愛いな。

「雪斗は子供好きだったっけ？」

と、風神が尋ねてきた。

「うん、可愛いしね！」

子供は好きなほうだ。同級生との付き合いより難しくないしな。

「私は好きかがよく分かりませんね……分からないって何ですか？  
分かると思うが蒼井さん。「分からない」が分からないといわれ  
てもすごく説明にくい。」



朝の会が始まった。俺たちは紹介のためか前に立たされている。

「はい、みなさん。今日は美城高校の皆さんと一緒に遊んでくれます！  
じゃあみなさんでお願いしますを言いましょう。せーの！」

『おねがいます！』

子供たちが元気にいってくれた。ああ……やっぱり可愛いな……

俺たちも自己紹介を終えた……。

遠足場所は結構近い公園だ。俺も小さいころによく遊んだな。

「では、ここからは自由行動です。みんな楽しく遊んでね」

『はい』

先生がそういうと一気にこっちに走ってきた。

「雪斗おにーちゃん！ みくとあそんで」

二つくりの幼女が寄ってきた、それもめちゃくちゃ可愛い子が。

「うん、いいよ。おにーちゃんと遊ぼうか」

こんな可愛い子と遊ばないバカはいない！ 遊ぼうじゃないか！

「ふ……冬樹……」

愛羅が話しかけてきた。なんか顔色が悪いな、大丈夫だろうか……  
「どうした？」

「冬樹って……もしかしてロリコ……」

「君は何か勘違いしている！ 俺はただの子供好きだよ！」

心配して損した！ 俺は純粋に子供が好きなだけ！ あの「ロ」から始まって「ン」で終わる言葉ではない！

「そうだよ！ 冬樹があれなわけないよね！」

愛羅が汗だらだらで言った。まあ、とりあえず誤解は解けたのかな？

「おにーちゃん！ ゆきとも遊んで」

「うん！ 遊ぼう！」

「ふゆきー！ 俺たちともあそぼーぜ！」 ↑男の子供

「ごめんな。また後で」

「おにーちゃん！ あたしとも遊んで！」

「うん！ いいよ」

うーん。やっぱり子供は可愛いな。

『……』

子供と仲良く遊んでいるのに、なぜかみんなにしらっとした目で見られる。何かへんなことをしたのだろうか……

「この……」

ようやく愛羅が口を開く。何が言いたいのだろう……

「この腐れロリコンがああああ！」

大声だった。めちゃくちゃ大声だった。そこ声で腐れロリコンといわれた……

「ちょっと待って！ 俺はロリコンじゃないよ！」

「あきらめろ雪斗！ さっきのやり取りを聞いてロリコンと思わない奴がいるか！」

風神にまでいわれた。なんか風神に言われるとショックなんだが

……

「冬樹君。君って……ロリコンだったんだね」

「木野山君は黙れ！」

そうだ！ 縁道寺君なら……

「縁道寺君！ 俺はロリコンじゃないよね！」

「……」

「なんか言って！ お願いだからなんか言ってええええええ！」  
ぎゃあぎゃあしているうちに遠足は幕を閉じた……



——帰り道——

「冬樹はロリコン♪」

「ロリコンじゃないよ！ あと変な歌作るな！」

愛羅が勝手に歌まで作った。ったくどいつもこいつも……

結局、楽しかったのだけど……ほかの人たちにひどい誤解をされてしまった日であった……

**第4話 ひまわり保育園にて……（後書き）**

ありがとうございました！

次回もよろしくお願いします！

**第5話 待ち合わせ中……（前書き）**

今回もよろしくお願いします！

## 第5話 待ち合わせ中……

「おゝい。冬樹」

ある昼休み、俺はクラスで一番チャラい尾崎修吾君に話しかけられた。

「どうしたの？」

「今度、愛羅の家に遊びに行くんだけどお前も行こーぜ！  
なぜ俺に話しかけたのかは分からないが……まあいいか。

それにしても愛羅の家か。金持ちだしどんな家か気になるな。

「でも愛羅は大丈夫なのか？」

「大丈夫！ もう許可はもらってるし！」

許可もらっているのか……それなら行かせてもらおうかな。

「うん、じゃあ行かせてもらおうよ！」

「イエーイ！ じゃあ日曜日、美城公園8…30に集合な！」

といって尾崎君はスキップをしながら去っていった。

——その日の放課後。

「雪斗！ 一緒に帰ろうぜ！」

話しかけてきたのは可愛い顔をした男、市川風神。紫のショートヘアでそこらへんの女子より断然可愛い。

俺も風神も帰宅部なのだが俺は学級長の仕事、風神は委員会の仕事でいつもより帰りが遅くなった。

新学期のときは風神が少し遅れると言ったからたまたま一緒じゃなかったけど、普段は一緒に登下校をしている。

「うん！ とつとと帰ろうぜ」

俺たちは話しながら校門を出た。

「そういえば雪斗って今度の日曜日って愛羅の家行くのか？」

「うん行くよ。何で知ってるの？」

「いや、俺も尾崎に誘われたから雪斗ももしかしたらと思ってな」  
「いったい尾崎君は何人誘っているのだろう。クラスみんなってことは無いと思うけど……。」

「愛羅って超お嬢様だからどんな家かちょっと楽しみなんだよな」  
確かに俺も結構楽しみにしている。お嬢様だから豪邸に住んでいるのだろう。

……というろしている内に風神の家に着いた。ちなみにここから少し行った場所が俺の家。

「じゃあな雪斗、また明日」

「うん、バイバイ」

俺は風神と別れ、自分の家に向かった。



——あつという間に日曜日

俺は、少し早く公園に着いてしまった。まだ風神、尾崎君が来ていない。

しばらく公園の時計台のところで待っていた。すると見覚えのあるクラスメイトが目に入った。

「あれ？ 冬樹君じゃない。どうしたのこんな所で？」

たまたまあったのは野崎秋葉さん。少し暗めの茶色のせみロングヘアとピンどめが特徴の美少女。

今日の野崎さんの服装は緑色チェックのスカートに白いカーディガンという組み合わせ。制服も似合っているが私服もかなり似合っている。なんとも野崎さんらしい私服だ。

「野崎さんこそどうしたの？ 俺は愛羅の家に行くからここで風神と尾崎君を待っていたんだけど……。」

「えっ！？ 冬樹君も愛羅の家へ？ 私も尾崎君に呼ばれてここに来たんだけど……。」

マジで尾崎君は何人誘ったのだろう……ん？ まてよ……野崎さん



が来るってことは……

「野崎く！ おはよう！」

やっぱり来た。藤堂裕也君が……とにかく野崎さんLOVEな熱血男。少し赤みの入った髪ではねている。顔自体は悪くないのだけど性格がとてめ残念。

「朝からうるさい！ 死ねごみくず！」

そして野崎さんの超毒舌発言！ 朝から怖い！

「おはようございます。……おはようございますって何ですか？」

個性的な性格をしている蒼井瑞希さんまでもが来た。青髪ロングヘアの美少女。今日は長袖の上に水色のキャミソールで下はショートパンツ、黒のニーハイという組み合わせ。蒼井さんはスタイルがいいから何来ても似合う。性格は異常だけどね。

「おはよう雪斗。」

「ちくす！ もう来てたのか！」

風神と尾崎君が来た。さらに……

「おはよう。 今日はいいい天気だね」

水色の髪のことそこかっこいい人木野山広隆君が来た。この人頭大丈夫か、今日は曇っているぞ。

「俺はハーレムを作る！ ……あ、みんなおはよう」

「おはよう」よりも「俺はハーレムを作る」という言葉が先に出るバカ男、鶴嶋鍵太君。黒髪で少し長めのロングヘア。

「よっ。 冬樹おはよう」

彼は縁道寺龍希君。緑色の髪のもで短髪、とてもやさしい男の子だ。……ってこのメンバーは保育園に行ったメンバーじゃないか。うすうす気付いてはいたけどまさか本当になるとは……さすが小説。何でもありだな。

「よし。じゃあ愛羅の家に行くぞー！」

『へーい』

俺たちは全員愛羅の家に向かった。

……次回、俺の存在は薄くなりそうだ……

**第5話 待ち合わせ中……（後書き）**

次回、愛羅の家に行きます！

特に面白くはありませんが次回もよろしくお願いします！

## 第6話 冬樹達in渡島家

愛羅の家に着いた。だけどこの家は……

『でええええええええ！』

あまりにも広すぎた。

庭にはプールがあるし、東京ドーム何個分かはある。愛羅ってまじでお嬢様だったんだな……。

「じゃあインターホン押すぜ！」

尾崎君は何のためらいもなく押した。ある意味大物だ。

ピンポーン

尾崎君が押してしばらくするとメイドさんらしき人がドアを開けてくれた。

「ようこそいらっしやいました。私、渡島家のメイドの光江花実みつえはなみと申します」

さすがメイドさんだ。礼儀が正しい。俺の周りは非常識な奴ばかりだからこういう人を見ると感動する。

「愛羅様の部屋に案内しますね。少し遠いですが……」

玄関から自分の部屋が遠いって家の中はどれだけ広いんだ……まあ、そこは突っ込まないでおこう。

そして俺たちはエレベーターで5階の愛羅の部屋へ向かった。ちなみにエレベーターや5階というのも突っ込まない方向で。

「お待たせしました。こちらが愛羅様の部屋となります」

やっとなついた。この家は広すぎる……野崎さんとかはもうばてている。

「ここが愛羅の部屋ですか。楽しみですね……楽しみって何ですか？」

まあ、蒼井さんはいつも通りなのでコメントはしないでおこう。結局「〜って何ですか？」という風になるし。

「ふふっ。やっと着いたか。まあ、サッカー部のエースな僕にはこれぐらいの長さどうって事ない……ぜえぜえ」

息切れしているのに調子こいている木野山君。あとサッカー部のエースはかなり無理があるだろう。

「イエーイ！ とっとと入ろうぜ！ あげぽよ」

チャライ！ チャラすぎる！ とにかくチャライしか言いようがない尾崎君。

「愛羅様。お客様です」

ガチャッ

「いらっしやい。どうぞ入って」

愛羅が出てきた。愛羅は薄ピンクのふわっとした感じのミニワンピースに黒タイツというロリータファッション。色白で金髪碧眼な愛羅にはとても似合っていた。性格には合っていないが……

「よっ！ 愛羅の部屋広いな」

「えっ？ これぐらい普通じゃない？」

愛羅の感覚がわからない……。

愛羅の部屋はピンクがメインとなった女の子らしい部屋だった。意外と少女趣味なのか？

「ところで何するの？」

野崎さんが問いかける。こんな家だから何でもできそうだな……

「おい愛羅！ 家の中に遊園地ないの？」

言ったのは尾崎君。バカかこいつは！ 家の中に遊園地なんかあるわけがないだろ！

「うーん。ここにはないけど渡島家が経営している遊園地が遠いところにあるよ」

おかしいだろこの家！ 普通遊園地なんかねえよ！

「あとうちは発明が得意な兄がいるからよく発明品を使うよ」

「どんな発明品なの？」

「人の中身を入れ替える装置とか、体が3cmになる薬とか……」

もうこれ普通じゃないな……。なんか日常系学園ものからめっちゃくちや変になってきたな。

結局、人生ゲームやトランプなど案外平凡な遊びになった。



そしていつの間にか時間はすぎて帰る時間になった。

「愛羅、今日はありがとう。……。ありがとうってなんですか？」

「じゃあ、また明日ね」

蒼井さんと木野山君。木野山君は行っていることは普通だけと言  
い方がうざい。

「また来てね」

愛羅が手を振ってくれる。ああやって笑ってると可愛いのに……  
もったいない（性格が）

とにかく、結構楽しかった。お菓子もおいしかったし……。

その後、俺たちも解散した。

疲れていたのかその日はぐっすり眠れた。

次の日に恐怖が待っているとは知らずに……

**第6話 冬樹達in渡島家（後書き）**

短くてすいません。

次回もよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2457y/>

---

変人学園の日常

2011年12月3日00時56分発行